

演題番号

高齢者向け Generativity 尺度の開発の試み

事務局記入)

○ ^{おおばひろみ}大場宏美、村山陽、野中久美子、鈴木宏幸、桜井良太、鄭恵元、
星旦二、藤原佳典（東京都健康長寿医療センター研究所）

【背景】わが国では、高齢者による世代間交流・次世代支援活動の優良事例は散在するが、理論的・科学的根拠に基づく活動プログラムの開発と評価が行われてこなかった。その一因として評価指標の不足が考えられる。そこで、本研究では、E.H. Erikson が自我発達理論の発達課題の1つとして用いた指標である「generativity」（世代性）に着目し、高齢者による学校支援ボランティアプログラム「ExperienceCorps」を進めるジョンス・ホプキンス大が開発した「Hopkins Generativity Index」の日本語短縮版を作成し、わが国の実情に即した簡便な generativity の尺度（以下、G 尺度）の作成を試みる。【方法】「Hopkins Generativity Index」は、「人生について抱く考え」「日々の行動」「自分の人生に対する現在の考え」「自分の人生に対する過去の考え」を測定する4つの尺度からなる全27項目、6件法で構成されている。(1) 翻訳版作成：英語のネイティブや有識者らと、英語原文との対応を確認した上で日本語訳を作成し、①初版調査：群馬県草津町および川崎市、横浜市で健康講座等の参加者462人に調査を実施した。②二版調査：日本語訳を4ヵ所修正し、東京都大田区の健康講座講演会参加者115人に調査を行った。調査時期：①2010年8月-10月。②2011年1月。調査内容：「Hopkins Generativity Index」の日本語版（全27項目）、性、年齢、有効回答数は、初版調査205票と二版調査88票の計293票であった（平均年齢72.7±5.9歳、男100人、女193人）。(2) 短縮版の作成：構成概念毎に因子分析を行い、因子負荷量の低い項目および初版調査と二版調査の因子負荷量が安定的でなかった項目を除外し、4項目4尺度からなる短縮版を作成した。(3) 本調査の実施：作成した高齢者向けの短縮版 G

尺度の本調査として、滋賀県長浜市在住の60歳以上の3000人を対象に無作為郵送調査を実施した。調査時期：2011年2月-3月。調査内容：「Hopkins Generativity Index」の日本語短縮版（全16項目）、改定版世代性関心尺度（丸島 他）における「世代継承性」、性、年齢、他。有効回答数は、2092票であった（平均年齢71.8歳±7.6、男性1114人、女性878人）。倫理的配慮：本研究は当研究所の倫理委員会の承認を得て実施した。

【分析】日本語訳の修正箇所の検討を行い、変更前後で回答の傾向に差がないこと、および4つの構成概念それぞれが1因子構造であることを確認した。さらにクロハックの α 係数は、すべての因子で.87以上の高い値が示された。構成概念毎に因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、因子負荷量の低い項目および初版調査と二版調査の因子負荷量が安定的でなかった項目を除外し、短縮版を作成した。本調査においても因子分析を行い、構成概念を確認した。さらに、既存の改定版世代性関心尺度（丸島 他）における「世代継承性」との併存妥当性を確認した。【結果】予備調査において、因子分析の結果、4項目4尺度からなる短縮版を作成した。本調査では、予備調査同様の因子構造が確認され、既存の改定版世代性関心尺度（丸島 他）における「世代継承性」との併存妥当性が示された。【考察】今後は作成した G 尺度得点と高齢者の健康指標（主観的健康感、抑うつ QOL、身体機能、認知機能など）との関連を調査することにより、generativity が高齢者の健康に及ぼす影響、および高齢者の productivity における generativity の意義について検討することが重要である。

E-mail ; ohba500@tmig.or.jp